

日本臨床麻酔学会 第45回大会への軌跡

大会長奮闘記⑩「祭りのあと」

日本臨床麻酔学会 第45回大会は、無事に全日程を終えることができました。参加登録者数は、当初の目標であった1800人を超え、盛会のうちに閉幕することができました。

本大会では、参加される先生、企業・関係者の皆さまに「来て良かった」「参加して良かった」と一つでも多く感じて帰ってほしいという思いで準備を進めてまいりました。また、準備に携わる教室の先生にも、楽しみながら取り組んでもらいたいという思いもありました。

力を入れた主な取り組みは、以下のとおりです。

- 会場ごとにテーマを設定するなどして、プログラム構成をできる限りわかりやすくすること
- 会場の中心を企業展示エリアにして、多くの方が企業展示にも足を運びたくなるよう工夫すること
- 多職種の方々も参加しやすい企画とすること
- 机や椅子を増設したり、キッチンカーを用意するなど、参加者が快適に滞在できる環境整備を行うこと

おかげさまで、「プログラムが充実していた」「ホスピタリティを随所に感じ、気持ちよく参加できました」「多くの医師にブースへお立ち寄りいただけた」といった感想をもらいました。

今回あらためて実感したのは、こうしたイベントの運営は、私たちが日頃行っている麻酔科医の仕事と本質的に同じだということです。場所が病院からポートメッセなごやに変わっただけ。部長がいて、その日の手術室のディレクターがいて、それぞれの部屋に担当麻酔科医がいる。ICU当番、無痛分娩当番、外来当番がいる。何かあれば、すぐに麻酔科手術室責任者へ報連相



をする——そのままの体制で、ポートメッセなごやの大会運営ができました。大会長および事務局長は挨拶回りや打ち合わせに、現場では本部に連日交代でディレクターを配置し、各会場には担当者を置き、演者・座長対応、トラブル対応、聴衆数の把握などをチャットで集約し、参加者の少ない会場への人員要請などを行いました。音漏れや座長未着など細かなトラブルはありましたが、大きな火事となる前に初期消火ができたのは、まさに麻酔科医の危機管理能力とチーム力の賜物であり、誇らしく思っています。麻酔科医は、イベント運営にもきわめて向いている——そう強く実感した3日間でした。

最後になりますが、参加者、演者・座長の先生、企業・関係者、そして運営を支えてくれたスタッフに、心より感謝申し上げます。また、16回にわたるこの「スキマTimes」の読者にも、厚く御礼申し上げます。誠にありがとうございました。

(上村 友二, 祖父江 和哉)